吾輩は、ネコである。

カスタムビート

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何かめっちゃ凄いネコが出る話。

目次

刺客達は、イヌである。 ―― 1
彼女は、美ネコである。 ―― 5

刺客達は、イヌである。

吾輩は猫である。名前はまだない。

そんな吾輩は今、シバイヌ帝国からの刺客によって人気の無い路地裏で正に”最後の瞬間”を迎えようとしていた……。

「ヨうケんは　わカっているナ。」

訛りの酷いネコ語だ。奴らの一員にしては練度が低すぎる。恐らく脚が付かない様に外注のを使い捨てで雇ったのだろう。……その使い捨て共に追い詰められてるこちらの立つ瀬が無いのだが。

「さあ?、知らない。あんたらの人違いだろう。」

惚けて揺さぶりを掛けてみたが、期待はしていない。恐らくこちらの素性以外ロクな情報も与えられていないだろうから。

ほんの少しカマを掛けたが大した反応は無かった。刺客達はモゴモゴと何やらシバイヌ語で言葉を交わした後に1人がおもむろにこちらを見据えた。

吾輩はびょうとヒゲをゆがめて怯え、両手をあげて腹を見せてみる。

と、その時、

「おまわりさん！こっちです！」
不意にそんな声が路地裏に響き渡る。こちらを指さして駆け寄ってくるのはネコの少女と制服のネコ警察官1人。
「止まれ！」等と声を上げてこちらに向かって警棒を振り上げている。
彼女らは”自分達なら助けられる”と考えたのだろう。
例えばそれは、カツアゲに遭っているネコがいると考えたのだろう。
だがそれは、大きな間違いだった。
刺客達はばらばらに懐に手を入れ、それぞれの銃を抜き出した。
それにまず警察官が気付き、うろたえながらも少女の襟首を掴んで引き寄せる。
彼らの中でゴロツキに思われていたイヌ達は、シバイヌ帝国から差し向けられた殺しも厭わないキラーだったのである。
イヌ達は躊躇わず銃を構え、少女と警察官の表情が恐怖に染まる。
吾輩は、猫である。他者に誇れる様な取り柄など持ち合わせていないが、普通より少し、喧嘩ができる。
こちらから視線を離した刺客達に膝立ちのまま一足に飛びかかる。
右足を地面につき刺し左足を一閃。刺客達は足首を砕かれ一斉に仰け反った。
地面に突き刺した足を抜き今度は両掌を付いて両脚の回し蹴りを放った。轟音と共

に放たれた回し蹴りは刺客達を打ち砕き左右の壁に突き刺した。
一息付いて辺りを見渡し、刺客達が生きていない事を確認すると、目の前で少女と警察官が固まっているのに気付いて吾輩はとんでもない失敗を犯した事を悟った。
吾輩は一目散に路地裏の奥に逃げたがこれも失敗である。目の前で殺人を犯したのだから逃げても追われる身となるのは必至。脅しを掛けて口外させない様にするべきだったが後の祭りである。
急を要する段階でどうにも回らなくなる自分の頭に呆れながら自宅に逃げ帰ると荷物を纏めて逃げる支度を始めた。逃走はスピードが命である。

片手持ちの鞄に収まる程度の私物を詰めた後、自宅の地下深くに備え付けられた炎上自爆スイッチを押した。これで1時間後には４０００℃の炎で爆発炎上しあとかたも痕跡が残らなくなる。
これで後は周囲をぶらついて何人かに顔を覚えさせ、人相で捜索が行われた際に情報が寄せられて周辺の捜査が始まった隙に遠くに身を隠す手筈である。
ちょうど今玄関のベルが鳴らされた。ついでに何か話して存在しなくなっているであろう指名手配犯の捜査に役立ててもらおうか。
吾輩はひと鳴きして玄関の扉を開けて対応を、

「……あっ。」

玄関先に居たのは、豊かな暮らしをしているのか白と銀の混じった艶やかな毛並みをした、目鼻立ちの整った少女だった。

あの時の、少女だった。

「……あっ……。」

吾輩は、見つかってしまった。

彼女は、美ネコである。

白と銀の混じった艶やかな毛並み。
あの時は光の加減でハッキリと見えなかったターコイズブルーの瞳は様々な感情が入り交じってか細かく揺れていて。
足首が辛うじて見える位の白いワンピースの胸元に（尻尾に着いているものと同じ）黒いリボンが揺れている。
目の前のネコの正体が分からず、吾輩は金縛りにあった様に動けなかった。
「……あの！」
目の前の少女が唐突に、往来を人間の気を引いてしまう程の声を上げた！いや、恐らく吾輩が考え込んでる間に何度か呼び掛けがあったのだろう。
「貴方は、先程私達を暴漢から守って下さったお方ではないですか…？」
!?
き、気付かれている！決して明るみに出てはならない吾輩の正体がヴェールの向こうから覗かれている!?
吾輩はとりあえず「あー」とか「うー」と悩むフリをしながら（実際悩んでいるのだ

が）今自分がどの位マズイ状況に置かれているか考えを巡らせた。
今現在、後ろに聳える吾輩の家では1時間内に爆発炎上する様に仕掛けられた自爆装置が作動していて、
目の前の少女は吾輩の犯行を直に見ており、
吾輩は今まさに似顔絵付きで指名手配されかかっていて、
吾輩の”正体”は決して明るみに出てはならない。
……。
「あの……？」
少女が、何を思ってかこちらを心配するかの様に再三声を掛けてくる。
唐突に吾輩は思い付いた！
目の前の少女が何故吾輩を追跡出来たのか、
どうすればここから証拠を隠滅出来るか、
その2つの問題を完璧に解決する方法をである!!
「あの……、丁度今お茶が湧いている……。上がっていくのが良いだろう…。」「は、はい！」

吾輩は、産まれて初めて女子をお茶に誘った。

所々染みが付いたフローリングの床には、しかしそこに置かれた様々な形の花瓶が隠しつつ彩りを与えている。

リビングには少し大きすぎるテーブルと背もたれの長すぎる椅子が少女には奇妙に思えたらしい。

吾輩が歩いた後を目をキラキラさせながら付いてきた少女は吾輩が引いた椅子に座り、「面白いですね！」と言っていた。

男の部屋に上がり込んでおいて警戒心を見せない少女を内心怪しみながらも家に残っている中で1番良いお茶を点てる。

吾輩の作戦、名付けて”クレマチス作戦”は少女をお茶やらお菓子やらで引き止めて、そのまま家の自爆で木っ端微塵になってもらおうという最高に冴えた作戦である。

少女が笑顔の裏で何を企んでいようが家に残る証拠と共に消えてもらう。特にこれといって大義がある訳でもないがこちらの保身の為ならば致し方あるまい。

頃合いを見て急須に入れた茶と湯のみ２つ、吾輩イチオシのお菓子店”又旅庵”のチョコレート最中を盆に載せてテーブルに運ぶ。

さて、唐突だが今から何が起きるか伝えよう。

耳をつんざく様な銃声が轟き、部屋中に穴が穿たれたのである。